

本学附属学校園教員による研究の概観と展望：

2022～2024 年度におけるコンピテンシー育成開発所の支援に着目して

山田 美穂（コンピテンシー育成開発研究所）

灰谷 知子（附属幼稚園）

江部 紀美子 岡田 博元 小沼 律子（附属小学校）

林 多恵子 向田 瑞貴 森 祐樹（附属中学校）

沼畑 早苗 丸山 実花（附属高等学校）

坂元 章（コンピテンシー育成開発研究所）

目次

I はじめに	3
1. 附属学校園における研究体制と動向	3
2. コンピテンシー育成開発研究所による研究支援	3
3. 研究業績の整理の枠組み	5
II 研究テーマおよび研究方法	6
1. A 各学校園内での共同研究	6
1-1 公開研究会	6
1-2 その他の各学校園主催の研究会・発表会等	8
1-3 各学校園単位での学外の研究大会等への参加報告	9
1-4 各学校園内での共同実践の報告	10
1-5 その他各学校園単位での成果物	10
2. B 附属全体の横断的な共同研究：附属学校園連携研究	10
3. C 教員個人の研究	11
3-1 個人名での単著・共著論文	11

3-2 個人名での学会発表・学外の研究大会等での発表	16
3-3 コンピテンシー育成のための授業研究	20
3-4 その他教員個人名での成果物	21
3-5 A・Bの成果の一部として発表・公開されたもの	21
3-6 表彰	22
4. 教材・論文データベースへの反応：社会的インパクトの一例として	22
IV 総括：附属学校園における研究動向と今後の課題	25
1. 附属学校園教員によるコンピテンシー研究の特徴	25
2. コンピテンシー育成開発研究所の支援による発展可能性と課題	25
2-1 授業事例からの効果検証と一般化	25
2-2 共同研究の構造化	26
2-3 今後の研究の展望	27
IV おわりに	28
資料：研究報告書・紀要・ウェブサイト（本報告書関係分）	30
文部科学省研究開発学校制度	30
研究紀要	31
ウェブサイト	31
引用文献	32

I はじめに

1. 附属学校園における研究体制と動向

本学の附属学校園では、多数の研究プロジェクトが有機的にリンクしながら、複層的・継続的に行われている。各学校園は文部科学省の研究開発指定を、高等学校は SGH（スーパーグローバルハイスクール）や SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受けてきた経緯もあり、研究開発課題に即した実践研究を数年間のプロジェクトとして継続し、指定期間が終了した後も発展させている。

附属学校園における研究の中核は、教員チームによる共同研究である。各学校園全体、学年・教科チーム単位、さらには大学や学外の研究機関と連携した研究など、教員はそれぞれ複数のプロジェクトに参加している。それらの研究の特徴として、教科教育や総合学習を通して、知識の詰め込みではなく、子どもたちが社会の中で生きる力を育むことをねらいとした授業開発研究であることが挙げられる。この動向は、20 世紀終盤以降の世界的な流れとして、子どもたちが学習者として習得すべきことが、知識から、認知能力、非認知能力、コンピテンシーへと移行してきた（美馬，2021）という潮流の中に位置づけられる。

「コンピテンシー」という語は、日本では最近まであまり浸透していなかったカタカナ語であり、全く新しい概念であるかのように捉えられやすい。しかし、学習指導要領の改訂によってキータムやキーフレーズが変わっても、一連の改革が対応しようとしている状況自体が変わるわけではなく（石井，2015）、附属学校園教員による研究には、コンピテンシーという用語を使っているか否かにかかわらず、「より包括的で全体的な資質・能力へ」（石井，2015）という教育の大きな流れの中での連続性を有している。このような視点から、次節以降では附属学校園教員による研究を広義のコンピテンシー育成開発研究と捉えて整理する。

2. コンピテンシー育成開発研究所による研究支援

以前より、本学学校教育研究部には教育研究推進専門委員会が置かれ、教育方法等の研究をはじめ、附属学校園連携研究の推進、現職研修など、附属学校園における教育研究推進が図られている。その成果に関する研究として、附属中学校長を務めていた加賀美（2018）による卒業生への調査研究がある。附属中学校・高等学校を卒業し本学に進学した大学生への質問紙調査を通して、附属学校の教育が学生の自己成長、キャリア形成、経験の活用、価値観形成にもたらす影響が追跡的に検討されており、中高大連携によるコンピテンシー育成

開発実践研究の先駆けと言えるだろう。

以上のような体制を一つの基盤として、令和4（2022）年度に発足したコンピテンシー育成開発研究所（ICD）は、「大学におけるコンピテンシー・ベース教育の推進」と「附属学校園等におけるコンピテンシー研究の推進と成果発信」の2点を趣旨とした組織である。本報告は、2点目の趣旨に関し、「附属学校園におけるコンピテンシー研究」の令和4年度以降の実績についてレビューし、成果発信につなげるという位置づけとなる。

また、「附属学校園におけるコンピテンシー研究」は、その担い手によって大別すると、①ICDが主体となって行うもの、②大学教員が附属学校園をフィールドとして行うもの、③附属学校園教員が主体となって行うもの、の3つに分類することができる。このうち、①と②についてはICDの年次報告書に記載されているため、本報告では③附属学校園教員が主体となって行うものに焦点を当てる。

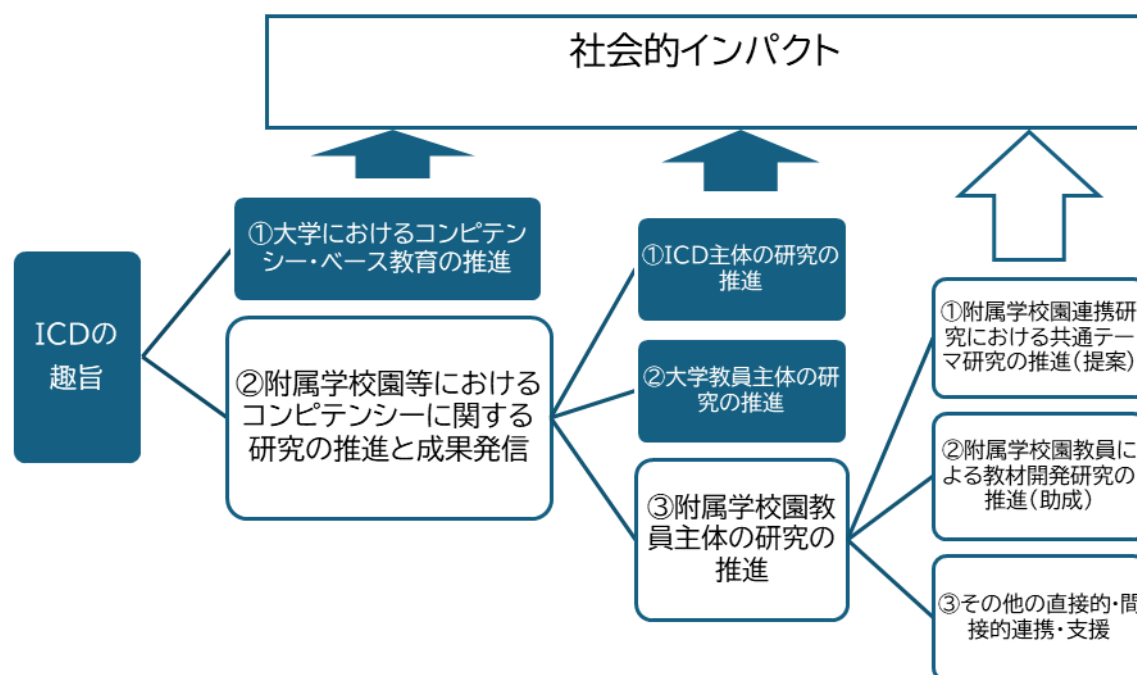


図1 本報告で扱うICDのミッションの範囲

この③附属学校園教員が主体となって行うコンピテンシー研究に対して、ICDはさまざまな直接的・間接的推進活動を行っている。その中でも「附属学校園連携研究における共通テーマ研究の推進（提案）」および「附属学校園教員による教材開発研究推進（助成）」については、ICDによる直接的な研究推進活動という視点から、年次報告書にて報告して

いる。また、それらの研究活動の成果は、附属学校園内の教育の質の向上のため還元されるにとどまらず、広く社会に発信され、全国教育改革に貢献することが期待されている。そこで、本報告では社会的インパクトの一例として、「お茶の水女子大学学校教育研究部 国立大学法人 お茶の水女子大学附属学校園 教材・論文データベース」に寄せられたコメントを紹介する。他の研究成果の社会的インパクトについては別途報告する。

前述したように、附属学校園の教員による研究は ICD の発足以前からコンピテンシー育成開発と深く関連していたと言えるだろう。ICD による研究支援が始まって以降は、「コンピテンシー」の考え方がより意識され、従来のキータームやこれまで蓄積された研究と結び付けられて、授業開発研究が展開している状況にある。

以上をふまえて、本報告では ICD からの直接的な提案や助成以外の成果も含めた「附属学校園教員によるコンピテンシー研究」全般を総覧し、その動向と課題を整理する。さらに、ICD による研究支援の意義と今後の課題について検討する。

3. 研究業績の整理の枠組み

附属学校園において行われている研究は、教材開発や授業案作成に直結した共同研究が中心であるため、独立した「学会発表」や「研究論文」の形になっていないものも多い。これは本学附属学校園のみならず、授業開発・教育実践研究全般に、さらにはヒューマンサービスの現場においてボトムアップで行われる研究（特に質的研究）全般に共通する傾向である。論文化はされなくても、時代的・社会的・施策的要請と目の前の子どもたちに必要な学びと授業計画を結び付けていく実践プロセスの記述や、その成果物としての教材や授業指導案の公開そのものが、研究プロセスの精緻な記述として高い価値を持っている。

このことから、本報告では、①書籍、論文、実践報告、リーフレット等成文化された成果、②学習指導案、教材、マニュアル、動画コンテンツ等の授業関連資料、③研究会・発表会の記録など、発表形式や媒体を制限せず、何らかの形で令和4年度以降に発表され、データとして保存されているものを抽出する。以下、便宜的に A~C の3群に分けて整理する。

A 各学校園内での共同研究

B 附属全体の横断的な共同研究

C 教員個人の研究

Ⅱ 研究テーマおよび研究方法

1. A 各学校園内での共同研究

1-1 公開研究会

各学校園では年1回「公開研究会」を開催している。正式名称は幼稚園では「公開保育研究会」、小学校では「教育実際指導研究会」、中学校では「教育研究協議会」、高等学校では「公開研究会」とそれぞれ異なっているが、複数の公開研究授業を中軸とした構成は全学校園共通である。文部科学省研究開発学校指定を受け、研究開発課題と同じテーマを掲げた回も多い。表6に、4学校園が開催した2022年度～2024年度の公開研究会の概要を示す。

幼稚園では、2019年度より、「幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚園の教育課程（3歳児～5歳児）の編成及び保育の実際とその評価の在り方」を主題に据え、研究開発を実施し、2022年度は、最終年度として、研究発表、公開保育及び協議会を行った。学内のいずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学こども園、さらには、学外近隣の乳幼児施設の協力のもと、入園前後、及び小学校入学前後の接続に着目し、子どもの育ちと学びの連続性を意識においたカリキュラムを編成し、それに基づく実践を示した。2023年度からは、新たに『『つくる』がうまれる暮らし』をテーマとし、子どもの「つくる」という表現に着目し、子どもの理解や教師の関わりの在り様について考察を進め、その過程を研究発表、公開保育及び協議会において示している。

小学校では2022年度・2023年度共に「学びをあむ」を主題として、研究開発指定（2019～2022年度）を受けた新領域「てつがく創造活動」を中核とした教育実践開発について、2022年度は研究発表と講演を、2023年度は公開授業を行い、参加者との協議を行った。この中でターゲットとされている「メタ認知スキルや社会情意的スキルの育成」は、コンピテンシーを捉える上でも重要な要素である。2024年度も、開発したカリキュラムの実践的検討を行った。

中学校では2022年度公開研究会のテーマ「創造的思考力」を「活動を通して立ち現れるコンピテンシー」として捉え、新学習指導要領、OECDが提示したコンピテンシー、その他代表的な教育学・心理学的理論と共に緻密な検討を行っている。

また、1-1でも触れたように、高等学校では2022年度の公開研究会の特集を研究紀要（第68巻）で組んでおり、「新学習指導要領で培うコンピテンシー」をテーマに開催された会の

報告として、コンピテンシーに関する講演とランチョンセミナーが行われたことが記され、3本の公開授業報告論文が掲載されている。

表1 公開研究会

学校園	年度	形式	年月日	曜日	テーマ	資料・報告書
幼稚園	2022	対面	2023年 2月10日	金	幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚園の教育課程（3歳児～5歳児）の編成及び保育の実際とその評価の在り方についての研究開発（四年次）	DB
	2023	対面	2024年 2月9日	金	「つくる」がうまれる暮らし	DB
	2024	対面	2025年 2月7日	金	「つくる」がうまれる暮らし	研究紀要・DB
小学校	2022	オンライン	2023年 2月18日		学びをあむ —新領域「てつがく創造活動」を中核とする教育課程の開発—（3年次）	発表要項
	2023	対面	2024年 2月16・17日	金土	学びをあむ —新領域「てつがく創造活動」を中核とする教育課程の開発—（4年次）	発表要項
	2024	対面	2025年 2月14・15日	金土	学びをあむ —新領域『てつがく創造活動』を中核とする教育課程の開発—（5年次）	発表要項
中学校	2022	対面	2022年 10月29日	土	試行錯誤と創意工夫のある「つくる学び」をつくる（1年次） ～各教科における見方・考え方を生かした創造的思考力を伸ばす授業のデザイン～	研究紀要51
	2023	対面	2023年 10月28日	土	全ての生徒がグローバル社会で輝くために ～帰国生教育の可能性をひらく～	研究紀要52
	2024	対面	2024年 10月26日	土	試行錯誤と創意工夫のある「つくる学び」をつくる（3年研究の2年目） ～創造的思考力を育てる学校づくりへの挑戦～	研究紀要53
高等学校	2022	対面	2022年 11月19日	土	新学習指導要領で培うコンピテンシー	研究紀要68
	2023	（開催なし）（※全校規模の公開行事としてSSH成果発表会を開催）				

	2024	(開催なし)(※全校規模の公開行事として SSH 成果発表会を開催。全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会の開催校を担当)
--	------	--

1-2 その他の各学校園主催の研究会・発表会等

一大イベントである公開研究会以外にも、各学校園ではさまざまな校内研究会(公開・非公開)、公開授業、各種発表会等が継続的・定例的に行われている。以下は各学校園の研究紀要、報告書、HP 等に記載されている情報をまとめたものである。

1-2-1 幼稚園

学内のいずみナーサリー、文京区立お茶の水女子大学こども園、附属幼稚園の三園で以下の取り組みを行っている。「三園合同研究会」では、年に2〜3回、幼稚園に集まり、写真を持ち寄ってそれぞれの園の実践を報告し合い、子ども理解につなげる研究会を実施している。三園の保育者が中心だが、他園に声をかけて実施することもある。「のびのび子育てサロン」は2023年度より年2回、三園で協力開催し、地域の4歳以下の子ども、保護者、そのきょうだいを対象に子育て支援の取り組みを行っている。「お茶大こどもフォーラム」はこども園設立に伴い実施されてきたが、お茶の水女子大学保育マネジメント研究会主催のもと、第6回より三園での協力開催となっている。

1-2-2 小学校

授業研究・研究協議会(年5回)や校内講演会(年2回)が定期的に開催され、学外にも公開されている。公開研究会・校内授業研究会以外にも、日常的に参観者の受け入れや、研究についての対話・相談も受け入れ、年間100名を越える参観者が来校している。2004年設立の「特定非営利活動法人 お茶の水児童教育研究会NPO法人」が、附属小における研究会のマネジメントや書籍の販売等を担当している。

1-2-3 中学校

中学校では、「研究会」に全教員が参加する形式となっている。さらに全教員は、教科ごとのチームである「教科WG」と「テーマ別WG」のそれぞれに参加するという研究組織になっている。2024年度は、「A学級WG」「B生徒活動WG」「C居場所・学習環境WG」「Dゆとりある学校作りWG」が発足し、それぞれのテーマに基づいて具体的な活動計画を立案し、実践をおこなうことで創造的思考力の育成を効果的に推進することを目指した。

1-2-4 高等学校

高等学校はスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受けており(I期:2019-

2023 年、Ⅱ期：2024-2028 年)、その成果報告会を毎年行っている。公開研究会と同時開催した年度もあるが、2022 年度以降は単独開催で、2023 年 3 月 21 日(火)に生徒・保護者・教員の他、一般参加者、卒業生、附属中学校 3 年生、大学のアドバイザーボード他関係教員および学生が参加し、代表生徒による口頭発表が行われた。午後は校内限定で、ポスター発表を通した生徒間での研究方法の助言指導が試みられた。続く 2023 年度は第 1 期の最終年度にあたり、5 年間の集大成となる成果報告会が 2024 年 3 月 20 日(水)に行われた。2024 年度は第Ⅱ期に入り、SSH 学校設定科目の 1 年生「課題研究入門」などの授業の公開を年 4 回程度実施し、地域に開かれた学校をめざしている。2024 年度の成果報告会は 2025 年 3 月 20 日(木)に行われた。以上のように、SSH 成果報告会は生徒による研究の発表であるが、生徒への研究指導や学内外の研究者との研究交流など、教員の広義の研究活動の一環ととらえられる。

1997 年から「中学生向け理数一日体験授業」という先駆的な試みを行っており、現在は SSH の取り組みの一つにもなっている。目的は、女子のみで理数系の講義・実習・実験を体験することを通して、女子中学生の理数分野への興味関心を促すことに加え、「中学生を対象とした授業の実践により、教育方法に関する実験的研究を行うなど教育活動への改善・活性化を図る」ことであり、各教員の授業研究にもつながる活動になっていると推測される。2022 年度～2024 年度はいずれも 6 コースが提供されている。

1-3 各学校園単位での学外の研究大会等への参加報告

幼稚園では、後述 3-2「個人名での学会発表、学外の研究大会等での発表」にも記載しているが、例年 5 月開催の日本保育学会において自主シンポジウムの企画運営やポスター発表を継続して行っている。ここ数年は、本園で開発した「対話型マップ記録」を PECERA(環太平洋乳幼児教育学会)や EECERA(ヨーロッパ乳幼児教育学会)においても発表し、世界に発信している。

高等学校では、毎年開催される「全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会」に教員が参加し、研究発表を行っている。2022 年度は 4 名の教員が「生活指導」「理科」「保健体育科」「家庭科」の各分科会で、2023 年度は 4 名の教員が「国語科」「数学科」「教科横断」の各分科会で、2024 年度は 5 名の教員が「地歴公民科」「外国語科」「附属のあり方」「生活指導」の各分科会で発表した。以上の詳細は研究紀要で報告されている。2024 年度は高等学校が当番校を担当し、全国からの参加者を迎えて 2 日間の大会を開催した。石井クンツ昌子理事・副学長による講演会、生活指導分科会における生活科学部心理学科教員 3 名

によるオムニバス講演等、大学教員も協力して大会をバックアップした。

1-4 各学校園内での共同実践の報告

中学校では各学年団による「教育実践報告」を研究紀要に掲載している。2022 年度紀要（第 51 集）には 3 学年とも「総合カリキュラム」の教育実践について報告している。総合カリキュラムとは、特別活動と総合的な学習の時間を総称する、附属中学校独自の枠組みであり、「自主研究」や「総合コミュニケーション・デザイン」が含まれる。024 年度紀要（第 53 集）においても、総合カリキュラムの大枠のもと、校外学習や宿泊行事における取り組みが報告されている。

1-5 その他各学校園単位での成果物

幼稚園では在籍する園児や入園希望の子どもへの保護者向けのパンフレット等を作成している。2022 年度（2023 年 3 月）には「育児手帖～子育て中のおうちの方へ～その 3」が発行された。

高等学校では SSH 生徒成果集および研究開発実施報告書を毎年作成しており、SSH 関連で開発された教材や教員による学会発表・論文、各種受賞や連携機関のリストも資料として掲載されている。一連の報告書は「SSH の成果・発信」としてホームページにまとめられている。（<https://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/ssh/d015159.html>）。

2024 年度 29 頁 2024 年度は SSH リーフレットも発行され、「国立大学法人 お茶の水女子大学附属学校園 教材・論文データベース」（<https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp>）にも収録されている。

2. B 附属全体の横断的な共同研究：附属学校園連携研究

附属学校園連携研究には、附属学校園の全教員が参加し、自主的研究を行っている。本学附属学校園独自の取り組みであり、独立したウェブサイトにて研究成果を発信している。現在は「ことば・国語部会」「社会科部会」「算数・数学部会」「理科部会」「表現を広げ深める部会」「自学・自主研究部会」「子どもの心とからだの発達部会」「ICT 部会」「外国語活動・英語部会」「エシカルラーニングラボ」「幼小接続部会」の 11 部会が活動しており、本学大

学教員が部会員あるいはゲストとして参加している部会もある。

附属学校園連携研究では、学校種や教科の枠を超えた連携が行われている。部会で課題を設定し、教員同士の議論、教材開発、授業事例検討、調査研究などを行うと共に、学内研究所との連携（理科部会とサイエンス&エデュケーション研究所）、複数の学校園合同での交流授業（エシカルラーニングラボ）、公開シンポジウム（算数・数学部会）といった研究活動を展開している。の算数・数学部会の「統計教育シンポジウム」は毎年公開で、2022 年度・2023 年度は第 6 回・第 7 回がいずれもオンラインで開催された。

それらの活動は、毎年「活動報告」「研究成果」「事例報告」などにまとめられ、ウェブサイトで公開されている。特に 2022 年度は、ICD からの共通テーマとして「幼稚園段階から大学段階までの間に『学びに向かう力』を喚起し、維持し、さらに高めるためにどのようにすればよいか」が提案されたことを受け、4 つの部会における研究成果が「『学びに向かう力』の喚起・維持・向上と校種間連携—4 部会の報告—」にまとめられている。また、ICD の令和 4 年度年次報告書にはそれらの報告に対する考察が掲載され、連動的な報告となっている。2023 年度は「『対話的な学び』により児童生徒等の資質・能力の向上を図る、幼小中高大の接続を意識した開発研究—3 部会の報告—」がまとめられている。

3. C 教員個人の研究

3-1 個人名での単著・共著論文

附属幼稚園・小学校・中学校・高等学校は、それぞれ独立した研究紀要を発行している。

2024 年度の幼稚園の紀要は、1 でも報告したように、文部科学省研究開発学校指定より引き続いて取り組んでいる研究テーマ「『つくる』がうまれる暮らし」に関する、研究活動全体の報告として構成されている。そのため個人名ではなく幼稚園教員全員による執筆となっている。また、高等学校の研究紀要は発行日が次年度の日付となっているため、ここでは 2022 年度～2024 年度に発行された（2021 年度～2023 年度の）紀要を参照する。

2022 年度に各紀要に掲載された、教員個人が執筆した論文は計 18 本（小学校 5 本、中学校 5 本、高等学校 8 本）、2023 年度は計 20 本（小学校 4 本、中学校 4 本、高等学校 12 本）、2024 年度は計 18 本（小学校 5 本、中学校 1 本、高等学校 12 本）である。学校別の論文題目一覧を表 2～4 に示す。

論文は、その大半が単著となっている。教員同士の共著は8本とあまり多くなく、いずれも高等学校の研究紀要に掲載されたものである。教員自身が担当した授業実践について記述し、児童・生徒からの反応を含めて振り返るスタイルの論文が中心となっており、このことが単著論文の多さにつながっていると考えられる。

さらに詳しく論文テーマを検討していくと、小学校ではプロジェクト型活動とそれをベースとした「てつがく創造活動」に力を入れており、「てつがく」の語や哲学的探究の根幹である対話、思考、言語化をキーワードとした論文が複数みられる。また、「“教材研究”から“授業づくり研究”へ」という副題（片山守道副校長、2022年度）が象徴するように、「教員が準備し提供するもの」から「児童との相互作用や協働をとおして模索し構築するもの」へと、授業観のアップデートに取り組んでいることが窺える。「子ども自身」「自分たちの学びを問い直す」（廣瀬修也教諭、2022年度）、「子どもの記録と対話から」（下田愛佳里教諭、2023年度）、「子どもと教師が共につくる」（和氣拓巳教諭、2023年度）などのフレーズにもその方向性が顕著に示されている。このことは、教科や単元で想定される学習内容にとどまらず、環境にはたらきかけ、自らコンピテンシーを伸ばすことのできる存在として児童を位置付け、さらに教師をそのパートナーあるいは支援者として位置付けようとする教育方針を反映するものでもある。

表2 附属小学校教員が執筆した論文題目

お茶の水女子大学附属小学校研究紀要 第30巻（2022年度） 2023年2月発行	
片山 守道	国語科「読むこと」の授業づくりに関する研究 ～“教材研究”から“授業づくり研究”へ～
江部 紀美子	小学校における市民性の育成を目指した救命教育 ーてつがく対話を取り入れた実践からの考察ー
下脇 陽子	帰国児童教育学級における「てつがく創造活動」と教科学習を関連させた学習の試み
田中 千尋	小学校理科における地学指導の実践的考察 ー天文領域を中心としてー
廣瀬 修也	子ども自身が教科学習の意義を語り、自分たちの学びを問い直す学習 ～教科を語るパネルディスカッションの実践（6年）を通して～
お茶の水女子大学附属小学校研究紀要 第31巻（2023年度） 2024年2月発行	
倉次 麻衣	ものづくりを通じた図形の学習
岩坂 尚史	論争問題学習「ハッ場ダム」実践の再評価 ードナルド・W. オリバーの理論を手がかりにー
下田 愛佳里	3年間の実践を子どもの記録と対話から、省察する
和氣 拓巳	「子どもと教師が共につくる体育カリキュラム」の実践提案 ー豊かなスポーツライフの実現を目指してー
お茶の水女子大学附属小学校研究紀要 第32巻（2024年度） 2025年2月発行	

足立 愛美	低学年における食育の試みー料理を考える活動とその考察ー
大村 幸子	探究的な学びにおける教師の役割ー小学校2年生「みがく」における学習者の主体性に注目した事例分析をもとにー
岡田 博元	“学びの実感”を拡げる活動と対話の往還ー新領域「てつがく創造活動」における「自覚」概念に着目してー
堀井 武彦	備忘録「図画工作の見方・考え方」
本田 祐吾	「リゾーム型の学び」について考えるー本校5年間の研究理論をまとめるー

中学校における研究では、「探究的な読みを引き出す」（戸谷順子教諭、2022 年度）、「『自分ごと』として捉える」（桐山瞭子教諭、2022 年度）、「主体的に考え表現する」（佐藤吉高教諭、2022 年度）、「主権者教育」「生徒参画による」（ともに寺本誠教諭、2023 年度）、「創作活動による『主体的・対話的な深い学び』の構築」（中山由美教諭、2022 年度）、など、生徒の主体的思考や当事者としての社会参加をねらいとした方針が読み取れる。また、ラジオ「気象通報」の資料を用いてその変遷と理科教育の課題を検証した調査研究（前川哲也教諭、2023 年度）もある。これらの研究は教科単位で区別されているものの、そのテーマや手法から得られる知見は他の科目や単元の区別を越えて応用可能なものとなっている。

表3 附属中学校教員が執筆した論文題目

お茶の水女子大学附属中学校研究紀要 第51巻（2022年度） 2022年12月発行	
戸谷 順子	探究的な読みを引き出す試み～読み比べから『形』の魅力を見つける～
渡邊 智紀	脈絡を意識しコンセプトで貫く「日本の諸地域」「地域の在り方」の単元配列の工夫 ～中核とする考察の仕方の関連性や特性を踏まえて～
中山 由美	「主体的・対話的な深い学び」を構築する ウクレレを活用した創作活動の実践検証
桐山 瞭子	生徒たちの日常に息づく表現と鑑賞の活動 ～生徒が「自分ごと」として捉える美術科の授業～
佐藤 吉高	生徒が主体的に考え表現する学びの創造 ～プロジェクト型学習で展開する柔道単元～
お茶の水女子大学附属中学校研究紀要 第52巻（2023年度） 2023年12月発行	
寺本 誠	政治的教養を培う中学校主権者教育授業の開発 -政権公約づくりと模擬投票を通して-
前川 哲也	ラジオ「気象通報」の変遷 ～理科教育とともに～
近藤 久美子	養護教諭が行う保健教育のあり方を考える
寺本 誠	生徒参画による制服選択制の導入 -多様性を尊重した制服のあり方の検討-
お茶の水女子大学附属中学校研究紀要 第53巻（2024年度） 2024年12月発行	

渡邊 光輝	「AI を使いこなす力」とは何か ーディベート学習における学習者の判断に着目してー
研究紀要以外に掲載された論文	
藤原 大樹	小学校算数科との接続を意識した「データの活用」の在り方ー中学校からー、新しい算数研究 no.613 (2022 年 2 月号), pp.20-23.

高等学校の研究紀要では、2023 年 7 月発行の第 68 巻（2022 年度）において、「高校教育におけるコンピテンシー育成」の特集が組まれ、8 本の論文が掲載されている（特集 2）。その中には、「お茶大コンピテンシー10」と新学習指導要領における資質・能力を対応させ、体育の授業におけるコンピテンシーの定着を調査した論文（佐藤健太教諭・丸山実花教諭、2022 年度）や、英語ディベート活動を通じたコンピテンシー育成効果を検証した論文（金子麻子教諭、2022 年度）などが掲載されている。

また、もう一つの特集「第 26 回公開教育研究会」にも、「新学習指導要領で培うコンピテンシー」をテーマに開催された公開教育研究会の公開授業報告として、3 本の論文が掲載されている（特集 1）。なお各校の公開教育研究会については「2. B 各学校園内での共同研究」において後述する。

2022 年発行の第 67 巻（2021 年度）もあわせて概観すると、「統合」「総合」というキーワード（朝倉彬教諭・山川志保教諭、2021 年度；遊馬智美教諭、2021 年度；朝倉彬・飯島裕希教諭・山川志保教諭、2022 年度）が目立つ。これは「総合的な学習（探究）の時間」のコンセプトに基づいているためと考えられ、複数の異なるスキル、学習目標、対象者、教材を組み合わせた実践法が多く取り上げられている。例として、「4 技能 5 領域」を結びつける（遊馬智美教諭、2021 年度）、「感染防止対策と思い出づくりの両立」（佐藤健太教諭、2021 年度）、「個別最適な学びと協働的な学び」（佐藤健太教諭・丸山実花教諭、2022 年度）、「生徒と参観者がともに」（朝倉彬教諭・飯島裕希教諭・山川志保教諭、2022 年度）、「読み比べ」（植田敦子教諭、2023 年度）、「合わせ読む」（畠山俊教諭、2022 年度）が挙げられる。これらの方法により、生徒が各教科や単元における学習内容や学習課題を相対化し、異なる要素を取り入れて思考し行動する力を身に着けることが目指されていると考えられる。

表 4 附属高等学校教員が執筆した論文題目

お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要 第 67 巻（2021 年度） 2022 年 6 月発行	
吉田 裕亮 （校長）	女高師高女での 100 年前のパンデミック ー第二年報の生徒欠席の記録からー
畠山 俊	教材の言語活動（漢文編）
玉谷 直子	歴史学習における主体的な学びをめぐる課題 ーグループワークと相互評価を手がかりにー
朝倉 彬・ 山川 志保	知の統合をはかる ー 3 年必修授業：持続可能な社会の探究（総合的な探究の時間）ー
遊馬 智美	4 技能 5 領域を統合的に結びつけながら教科書の内容理解を深める

	ーコミュニケーション英語Ⅱにおける授業実践報告ー
金子 麻子	ケンブリッジ英語検定の導入とそのスピーキング活動への応用 ー新学習指導要領「話すこと [やりとり]」の指導と評価の試みー
山口 健二	RSA 暗号の暗号化と復号を体験する教材の開発
佐藤 健太	コロナ禍における 74 回生修学旅行 ー感染防止対策と思い出づくりの両立ー
お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要 第 68 巻 (2022 年度) 2023 年 7 月発行	
吉田 裕亮 (校長)	二項係数を含む交代和とベータ関数 ー本校 S S H 数理・情報科学分野の話題からー
[特集 1] 第 26 回公開教育研究会	
朝倉 彬・ 飯島 裕希・ 山川 志保	SSH 学校設定科目 持続可能な社会の探究 (総合的な探究の時間) ー生徒と参観者がともに課題を探究するポスターセッションー
三橋 一行	「仮説検定の考え方」の指導について ー実践を通して考える仮説検定のロジックと指導のポイントー
植田 敦子	読み比べ活動 ー『伊勢物語』『筒井筒』と『大和物語』『沖つ白波』の読み比べー
[特集 2] 高校教育におけるコンピテンシー育成	
佐藤 健太・ 丸山 実花	種目選択制体育授業における個別最適な学びと協働的な学び ー新学習指導要領で求められる資質・能力に着目してー
佐藤 健太	コンピテンシー・ベースにおける保健で伸ばすべき資質・能力とは ー10 年の歩みを振り返ってー
金子 麻子	英語ディベート活動を通して培うコンピテンシー
吉村 雅利	レオナルド・ダ・ヴィンチ研究を活かす授業実践 ーコンピテンシーとルネッサンス的人間像ー
一般論文	
朝倉 彬・ 飯島 裕希・ 山川 志保	知の統合をみとる ー3 年必修授業: 持続可能な社会の探究 (総合的な探究の時間) ー
畠山 俊	『源氏物語』桐壺巻の読解指導 ー『湖月抄』と合わせ読むー
山川 志保	「歴史総合」で培う力 ー「歴史総合」を生徒はどう感じ、どのような力を身に付けたのだろうか? ー
遊馬 智美	教科書の内容理解を深める言語活動とは ー3 年間のコミュニケーション英語授業実践を振り返るー
お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要 第 69 巻 (2023 年度) 2024 年 7 月発行	
吉田 裕亮 (校長)	女高師高女での 100 年前のパンデミック II
[SSH 特集]	
山本 夏菜 子・朝倉 彬	発表形式の違いからプレゼン技術と態度を学ぶー水質調査を活用した科学的探究プロセスの体験ー
朝倉 彬他	「課題研究基礎」 授業を振り返り共通項から活用・応用を意識する
葭内 ありさ	「家庭総合・生活の科学」 教科内連携を活用した SSH 指定校家庭科における STEAM 教育と「生活

	の科学」のふりかえり
飯島 裕希	「持続可能な社会の探究（総合的な探究の時間）」 知の統合をうながす課題設定
金子 麻子	英語で STEAM：英語を用いた教科横断型活動の実践
平田 智子	「英語コミュニケーションⅡ」における科学論文英語 Abstract 書き方の 指導
玉谷 直子	学校設定科目「歴史探究」の取り組み－主体的・対話的な学びで培う探究 力と歴史的な見方・考え方－
丸山 実花・ 河西 静香	体育の授業で培われる資質・能力に関する一考察－生徒の記述からみる協 働性と創造性の育成－
一般論文	
阿 部 真 由 美・十九浦 美里	主体的に学習に取り組む態度の評価材料に関する実践報告－主体的で数 学的な活動の場をつくる－
増田 かやの	しなやかな心の土台づくり－メンタルヘルスの保持増進につなげる保健 学習の試み－
丸山 実花	多様性の時代になぜユニゾンを踊るのか －第 73 回ダンスコンクールの記録－
お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要 第 70 巻（2024 年度） 2025 年 7 月発行	
浅田 徹（校 長）	古文を読むべき理由について
畠山 俊	論理国語（三学年）における PBL の試み
飯島 裕希	「地方自治は民主主義の学校」に学校で取り組む－文京区と連携した「公 共」大項目 C の実践事例－
金子 麻子	ChatGPT を活用した英文エッセイライティング指導の試み
村田 文	前置詞をタスク活動で指導－お絵描きで前置詞を学ぶ－
丸山 実花・ 河西 静香	体育の授業で培われる資質・能力に関する一考察－生徒の記述からみる省 察的思考力と内的統制感について－
河西 静香	「子ども睡眠健診レポート」からみる睡眠の実態と行動変容への取り組み
原 大介	「音楽の要素」を意識した DAW の授業～ミキシング作業を中心に～
沼畑 早苗	さくらサイエンスハイスクールプログラムを活用した国際性の育成－科 学の力で未来を共創する女性リーダーの育成に向けて－

3-2 個人名での学会発表・学外の研究大会等での発表

学外で開催される学会や研究会における附属学校園教員の研究発表の実績について、本報告では「国立大学法人 お茶の水女子大学附属学校園 教材・論文データベース」

(<https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp>)に掲載されている発表資料を中心に示す(表4)。ただし本データベースへの資料の掲載は任意であり、全ての研究発表を網羅してはいないため、未掲載の発表の件数等については把握できていない。

表5 学会発表・学外の研究大会での発表題目

Kodama, R., Takahashi, Y. & Sato, H.	幼稚園	Documentation in Japan: Focusing on the significance of dialogue. (EECERA 2022 Conference, University of Strathclyde, Glasgow)
伊藤 綾子・佐々木 麻美・渡邊 満美・佐藤 寛子・川崎 徳子(山口大学)	幼稚園	子どもを真ん中に保育を考える～面白さを語り合うことから～(日本保育学会第75回大会, 2022年度, オンライン, 自主シンポジウム)
伊藤 綾子・佐々木 麻美・佐藤 寛子・村石 理恵子(東京女子短期大学)	幼稚園	子どもを真ん中に保育を考えるⅡ～遊び心を手がかりにして(日本保育学会第76回大会, オンライン, 2023年度, 自主シンポジウム)
Kodama R., Takahashi Y., Sato H., Sugiura M.	幼稚園	Development of interactive map recordings and documentation. (PECERA 2023, Hotel Grand Inna Kuta Bali)
高橋 陽子・灰谷 知子	幼稚園	保護者と副園長とで語り合うことの意味を探る～保護者・保育者の変容に着目して～(日本保育学会第76回大会, 2023年度, ポスター発表)
佐藤 寛子・佐々木 麻美・伊藤 綾子・村石 理恵子	幼稚園	子どもを真ん中に保育を考えるⅡ～遊び心を手がかりにして～(日本保育学会第76回大会, 2023年度, 自主シンポジウム)
杉浦 真紀子・谷地 理沙・渡邊 満美・川崎 徳子	幼稚園	子どもを真ん中に保育を考えるⅢ～ぐちゃぐちゃと過ごす中で思うこと、4歳児と保健室～(日本保育学会第76回大会, 2023年度, 自主シンポジウム)
灰谷 知子・小玉 亮子・高橋 陽子・杉浦 真紀子	幼稚園	対話型マップ記録による省察(日本保育学会第77回大会, 2024年度, ポスター発表)
佐藤 寛子・佐々木 麻美・田村 郁・渡邊 満美・村石 理恵子	幼稚園	子どもを真ん中に保育を考えるⅣ～やっぱり子どもはおもしろい～(日本保育学会第77回大会, 2024年度, 自主シンポジウム)

R.Kodama,H.Sato,Sasaki And T.Haitani	幼稚園	子どもの言葉を通して広がるつながり 対話型マップ記録の実践から(環太平洋乳幼児教育学会, 2024 年度, ポスター発表)
岡田 博元・本田 祐吾	小学校	子どもの“今”をみとり次の学びを描く国語科授業づくり ことばへの「感度・理解・拡充」の視点からみた書くことの学習(全国大学国語教育学会第 143 回千葉大会, 2022 年度)
杉野 さち子	小学校	子どもの見取りをもとにした授業改善ー小学校 4 年生「ものの温度と体積」の実践より(日本理科教育学会, 2022 年度)
岡田 博元	小学校	教室で読むことでことばへの感度を耕すーワークショップ型の読むことの実践からー(全国大学国語教育学会 145 回信州大会, 2023 年度)
小沼 律子・佐久山 有美・富田 京子・浜口 順子	小学校	子どものふり返し記録をもとにした保護者との“非公式な対話”に関する一考察(日本保育学会, 2023 年度)
杉野 さち子	小学校	自然への関わりにおける子どもの表れー低学年の学びから理科への接続についての考察(日本理科教育学会, 2024 年度)
岡田 博元	小学校	文化的実践としての新教科「てつがく」ー「分有」という概念に着目してー(第 5 回哲学プラクティス学会, 2024 年度)
河合 紗由利	小学校	被加数と加数の関係を考えるー第 1 学年「たしざん」ー(第 106 回全国算数・数学教育研究(大阪)大会)
小沼 律子	小学校	小学校低学年における子ども・保護者・教師の協働記録に関する一考察.(共創学会第 8 回年次大会, 2024 年度)
有友 愛子・和田 早苗・都甲 由紀子	中学校	衣生活から広がる内容横断、教科横断の中学校家庭科の授業デザインー食用色素による毛糸の電子レンジ染色を教材としてー(日本家庭科教育学会第 66 回大会, オンライン, 2023 年度, 口頭発表) https://www.jahee.jp/pdf/youshi/taikai2023_youshi.pdf
藤原 大樹	中学校	単元計画(中 2 四分位範囲・箱ひげ図)(第 102 回全国算数・数学教育研究(茨城)大会論文要旨集)

藤原 大樹	中学校	貸し出し靴を買い替えよう！[ICT 活用]（中 1 相対度数、確率）（第 104 回全国算数・数学教育研究（島根）大会 当日資料）
藤原 大樹	中学校	My マスキングテープを作ろう（中 1 図形の移動）（第 104 回全国算数・数学教育研究（島根）大会 当日発表資料）
藤原 大樹	中学校	ボディークソープはいつなくなる？（中 2 一次関数）（第 105 回全国算数・数学教育研究（青森）大会 資料）
藤原 大樹	中学校	2050 年の北極の氷は…？（中 2 一次関数）（第 105 回全国算数・数学教育研究（青森）大会 発表資料）
藤原 大樹	中学校	五円玉の穴から満月は見える！？（中 1 一次方程式・平面図形）（第 72 回関東甲信静数学教育研究（群馬）大会当日配付資料）
藤原 大樹	中学校	一次関数のみなすことの段階的指導 教材の分類と授業化（中 2 一次関数）（日本数学教育学会第 11 回春期研究大会論文集（2023））
藤原 大樹	中学校	中 2 での関数指導の改善：ICT 活用を含めた「みなすこと」の段階的指導（2023 年度 第 105 回全国算数・数学教育研究（青森）大会）
藤原 大樹	中学校	卒業期における空間図形の総合的な考察を促す課題学習（2023 年度 日本数学教育学会第 8 回中学校数学授業づくり研究会）
藤原 大樹	中学校	「論理の順序」を長い眼・広い眼で育てる学習指導（2023 年度 日本数学教育学会第 8 回中学校数学授業づくり研究会）
渡邊 光輝	中学校	中学校国語科における生成 AI を活用した授業の開発～学習者と AI の判断の差異に着目した理解と表現の学習指導を通して～（全国大学国語教育学会第 145 回信州大会 2023 年度）
渡邊 光輝	中学校	私の心惹かれるもの—中学校国語科における批評文を書く授業の工夫—（2024 年度 関西個性化教育学会 報告資料）
金子 麻子	高等学校	使いながら英語を学ぶ場所としての STEAM 活動 —高校における英語を用いた教科横断型の課外活動の実践—

	学 校	(関東甲信越英語教育学会 第 47 回埼玉研究大会 2023 年 8 月 26・27 日)
丸山 実花・佐藤 健太	高 等 学 校	保健の授業で育成される資質・能力に関する一考察 ―指 導者の指導観と生徒の記述に着目して― (2023 年度 日 本保健科教育学会第 8 回研究大会)
沼畑 早苗	高 等 学 校	地理総合に向けて ―地域調査をどのように扱うか ― (第 62 回全附属高等学校部会教育研究大会)

3-3 コンピテンシー育成のための授業研究

2022 年度に行われた、コンピテンシー育成をターゲットとした授業実践について、ICD 下島泰子准教授による解説が付され、教材・論文データベースに収録されている。実践報告書 10 件のタイトルは以下のとおりである。

表 6 コンピテンシー育成のための授業研究 実践報告書

佐藤寛子・伊藤綾子・ 灰谷知子	幼稚園	『見る・知る』を探究する～デジタル顕微鏡の活用～
有友愛子・伊藤綾子・ 佐藤寛子・灰谷知子	幼稚園・ 中学校	毛糸をめぐる交流～園児と中学生の出会いとかわり～
佐藤寛子	幼稚園	園庭の恵みがもたらす暮らし
佐藤寛子・佐々木麻美	幼稚園	悔しい気持ちに向き合う～4 歳児が始めたラグビー～
佐藤寛子	幼稚園	研究って何だろう？～5 歳児による「研究所」の遊び～
灰谷知子	幼稚園	「おちゃのみずゆうびんきょく」遊びを通して～コン ピテンシーの基盤となる暮らしを考える～
和氣拓巳	小学校	自分で進める 「えらぶ テーマ単元学習」 で主体性 を涵養する
和氣拓巳	小学校	自分で進める 「テーマ単元学習」で自己評価能力を涵 養する
有友愛子	中学校	多様性とのであい ～ちがいにリスペクト～

有友愛子	中学校	願いを叶え 学びをつなぐ ～毛糸の染色～
------	-----	----------------------

3-4 その他教員個人名での成果物

表 7 教員個人名での成果物

渡邊 光輝	中学校	(生成 AI を活用した授業事例) 新入生の心に響くメッセージカード	授業事例
渡邊 光輝	中学校	AI と読む「春よ、来い」	授業事例
飯島 裕希	高等学校	共生のあり方を考える「公共」の授業実践 ～「やさしい日本語」を事例に～(東書 E ネット 2023 年 5 月 12 日公開)	授業事例
葭内 ありさ	高等学校	みんなの未来にエシカル消費(消費者庁パンフレット監修)	パンフレット
藤原 大樹	中学校	大谷投手の新聞記事のグラフは？(中 2 箱ひげ図(導入))(黒潮町立大方中学校研修会(数学))	研修会資料
藤原 大樹	中学校	ぶどう算のきまり(中 2 文字式の説明)(2024 年 2 月 愛川町立愛川中学校研修会資料)	研修会資料
藤原 大樹	中学校	「過不足の問題」をいろいろな方法で解いてみよう(中 1 一次方程式)(令和 5 年度 沖縄県教育委員会研究指定校校内研修 兼 島尻管内研修会)	研修会資料
藤原 大樹	中学校	投影図から立体模型を作ろう(中 1 投影図)(令和 4 年度沖縄県島尻地区 数学科授業づくり研修会)	研修会資料
藤原 大樹	中学校	連続する 2 つの奇数の平方の差(中 3 多項式)(令和 5 年度教育実習生 参観授業)	研修会資料
藤原 大樹	中学校	歩くん、どれくらい歩いたの？(中 2 連立方程式)(御徒町台東中学校 授業研究会)	研修会資料

3-5 A・B の成果の一部として発表・公開されたもの

「国立大学法人 お茶の水女子大学附属学校園 教材・論文データベース」に個人名で掲

載されている資料の多くは、各学校の公開研究会や校内授業研究会、附属学校園連携研究によるシンポジウム（算数・数学部会による統計シンポジウム）、本研究所を含む本学の研究機構のイベントや刊行物の中で発表されたものとなっている。これらはそれぞれ「A 各学校園内での共同研究」、「B 附属全体の横断的な共同研究」に該当するため、ここでは割愛する。

3-6 表彰

藤原大樹教諭（中学校）が、公益財団法人統計情報研究開発センター主催の「統計・データサイエンス力向上のための授業に係る優秀事例表彰中学校の部優秀賞」を受賞した（2023年3月）。

「統計的探究プロセスにおける批判的思考と方法知の育成 ～教材「小指ギャップ」の教科等横断的な扱い～」

https://www.sinfonica.or.jp/assist3/rireki/school_rireki.html

4. 教材・論文データベースへの反応：社会的インパクトの一例として

2018年に運用開始した「国立大学法人 お茶の水女子大学附属学校園 教材・論文データベース」には、「活用事例・コメント」機能が実装されている。一般公開されている個々のコンテンツを、他校の教員等が閲覧した際に、感想や意見を送信したり、公開されている教材や授業案を用いた事例をフィードバックすることができる仕様となっている。送信された「活用事例・コメント」も該当コンテンツのページ上で公開されるため、コンテンツを作成した附属学校園教員もその後の研究の参考にすることができ、インタラクティブな成果公開と情報共有が可能となっている。

データベースの閲覧数は増加傾向にあり、活用事例・コメントも膨大な数ではないものの、息長く閲覧され、活用されている成果物が一定数存在しており、実用的なアーカイブとしてデータベースが機能していることが窺える。教材や授業案のような成果物が、オリジナルの制作者（附属学校園教員）によって開発後に公開され、様々な現場にいる教員がカスタマイズしながら活用し、さらに意見交換によってブラッシュアップされていくという、ダイナミックな循環が生じていると考えられる。教材・論文データベースは、そのような社会的インパクトの創成の場の一つになっているとも言える。

活用事例・コメントは、中学校・高等学校教員のコンテンツに対する登録が多い傾向にあり、中学校・高等学校は教材・論文自体の登録数が多いことや、掲載された教材を活用しやすい科目内容が多いことなどが影響していると考えられる。しかし、幼稚園・小学校を含め、他校教員だけでなく、学校関係ではない職業の人や、保護者、さらには小学生本人からのコメントもあり、本データベースが幅広い対象者に閲覧され、活用されていることが推測できる。

表 8 教材・論文データベースの「活用事例・コメント」利用状況（2025 年 3 月現在）

2018 年度運用開始以降に投稿された「活用事例・コメント」の全数	73 件
2022 年度以降に投稿された「活用事例・コメント」の数	40 件
2022 年度以降に登録されたコンテンツに対する「活用事例・コメント」の数	22 件

表 9 「活用事例」の例（抜粋・要約）

中学 2 年生では、家庭科で 1 学期に食分野（肉・魚・豆腐を使った調理を中心に）を、3 学期に「共に生きる」をテーマに、高齢者福祉や障がい者福祉についてと、消費生活について学んだ。そして、高校 1 年時には生徒の関心に沿って方面別の研修旅行があり、岩手・宮城方面では石巻などを訪れ震災に関連した学習を行う。このような流れを意識して、「共に生きる」「持続可能な生活」を食生活にも取り入れる実践として、サバ缶を使った調理実習とフェアトレードのチョコレートの試食を行った。食品ロス削減を意識し、消費しながら備蓄するローリングストックの考え方を紹介して実習を行った。【活用元教材・論文：「サヴァ缶クッキングでエシカルアクション探し」】
令和 5 年 3 月に授業を実施した。ねらいは、箱ひげ図の必要性を理解することと、データの分布の傾向を比較して批判的に考察することである。元の教材に 2 点アレンジを加えた。1 点目は SGRAPA でつくった図やグラフを Google スライドに貼り付け、考察し、結論を出したこと。2 点目はスライドを共有し、他者の考察と結論を読み、コメント機能を使ってコメントを入れたことである。【活用元教材・論文：「箱ひげ図はなぜ必要か」に迫る問題解決と試行錯誤を通した単元指導】
従来からあるビー玉ゲームの活動は、児童に人気がある活動ではあるが、一度組み立ててしまうと、活動途中で新しい着想があっても修正作業が困難且つ時間を要していたが、マグネットを活用した本題材では、発想の転換や修正作業が容易であることに特色がある。このことは「対話的で深い学び」を目指す新学習指導要領の基本理念との親和性があると考え本題材を活用した実践を試みたいと考えた。【活用元教材・論文：「第 4 学年『図画工作』学習指導案『ためして 見つけて 組み立てよう ―マグネット式ビー玉ゲーム―』】

表 10 「コメント」の例（抜粋・要約）

保護者との関係を作ることで、保育が充実することも日々の教育活動の中の視点として大切だと考えました。私は小学校教員でしたが、幼児教育については素人です。小学校ではどうしても保護者に教える立場だったことを反省するばかりです。保護者に寄り添ったかわり方を考えたいと思います。【幼稚園 園長】
まだ小学生だけれどとても参考になった。今歴史の勉強をしているからちょうどよかった。ありがとうございます。【小学生】
難解な数式がエレガントな図で表されており感動した。改めて数学の美しさを認識した。【保護者（校種不明）】
子ども達にもわかりやすかったです。【中学校 教諭】
「実際に第 2 学年の指導をしているため、自分が受け持っているクラスでもやってみたいと思いました。生徒の興味・関心を引ける内容でもあるため、生徒も楽しく学べるのではないかと考えました。【中学校 教諭】
本校はまだ実践できるレベルに到達していませんが、基本的な姿勢としては非常に啓発を受けました。精進し、是非実践できる日を迎えたいと思います。【高等学校 常勤講師】
授業の紹介では、ポイントをしばってまとめられているため、本校でならどのように実施するかなど学校や生徒の実情に合わせてアレンジしやすいまとめ方になっていて良かったです。【高等学校 教諭】
普段の授業では扱うことができない SSH オリジナルの取り組みがわかりやすく表記されていました。これから探究活動を行おうと考えている中学・高校教員にも、活動の方向性を示すことができているガイドブックになっていると感じました。【高等学校 教諭】
こまやかでメリハリの利いたご実践を拝読し、勉強になることばかりでした。私は教育困難校に長く在籍する高校教師ですが、日々、創意工夫をしながら生徒たちとともに新しい授業を創造し続けてきました。ペアワークなどの活動を取り入れたりしながら 1 コマの授業が単調にならないようにしていますが、いまだに難儀しています。ご教材・ご論文を提供していただき、とても感謝しております。【高等学校 教諭】
実地に赴いての注釈的資料や、論文の調査など細やかな目配りがなされていて勉強になります。ありがとうございます。【大学教員・研究者】

IV 総括：附属学校園における研究動向と今後の課題

1. 附属学校園教員によるコンピテンシー研究の特徴

本報告では、2022 年度～2024 年度の附属学校園教員による研究を、A 各学校園内での共同研究、B 附属全体の横断的な共同研究、C 教員個人の研究の 3 つに分類して概観した。

A～C のいずれも、授業研究が中心となっている。テーマは教科教育に限らず、総合学習や宿泊学習、さらには教員による研究会の報告も含むが、いずれも広義の授業開発研究と位置付けることができる。その中で、授業者の豊かな創造性や実践知を活かした、オリジナリティの高いユニークな教材開発が行われ、各種研究会・発表会、さらには研究紀要、報告書、附属データベースといった媒体において、他校の教員や研究者にも活用可能な形で情報発信されていることは、附属学校園の学術的・社会的貢献活動として特筆に値する点である。

このような研究活動を持続できる背景には、全附属学校園が同じキャンパス内に位置していること、またいずれも大規模校ではないことから、各学校園内および学校園間において、文字通り「顔の見える」、そしてフットワークの軽い連携がしやすいという強みが挙げられる。また、大学も同キャンパス内にあり、大学教員との協働がしやすい環境がある。このことにより、附属学校園における研究に専門的研究者の助言指導が得られやすいというメリットがあることは、附属学校園教員の研究業績から窺い知ることができる。

附属幼稚園・小学校・中学校は文科省の研究開発学校の指定を受けてきた歴史があり、附属高等学校は SSH の指定を受けていることから、研究開発課題の大テーマのもと、多様な試行がなされていることも、附属学校園における研究の特長である。さらには校内の教科・学年団や附属学校園連携研究の各部会の年間テーマ等、大小さまざまなユニットにおいて研究テーマやキーワードやキャッチフレーズが、随所に掲げられている。これらは国の教育施策や指針、大学のポリシー、学校園単位での教育方針、教科の特性、目の前の子どもたちの状態を総合的に把握し、実現可能な授業計画に落とし込み、附属学校園として統一性・一貫性のある実践を生み出そうとする真摯な取り組みの賜である。

2. コンピテンシー育成開発研究所の支援による発展可能性と課題

2-1 授業事例からの効果検証と一般化

附属学校園における研究は、そのほとんどが、教師が「自分の」もしくは「自分たちの」

授業について行っている一人称的研究となっている。そのため、授業テーマの導出、実践経過については、授業者本人だからこその緻密な記録がなされ、教材開発と公開も積極的に行われている。今後は実践記録や開発された教材の質的・量的豊かさを活かしつつ、成果の検証と考察、複数の授業成果を統合するメタ研究を加えていくことが期待される。

この点に関して、ICD との協働という観点からは、ICD 主体で行ってきた研究と附属学校園での実践研究とを統合するような研究の展開が期待される。ICD が行ってきた、「お茶大コンピテンシー10」の開発や、発達段階に沿ったコンピテンシーの測定・評価ツールの開発研究は、各学校園における実践研究と結びつくことで、幼・小・中・高・大と接続する教育課程上にコンピテンシー育成開発を位置づけ、研究をさらに促進する可能性をもっている。

2-2 共同研究の構造化

附属学校園における研究は、学校単位・研究会単位での共同研究が中心であることも大きな特徴である。より良い新しい教育を目指すこれらの実践研究は、教師自身の授業改善を通して社会的ベターメントを目指す研究、すなわちアクション・リサーチの枠組みの中に位置づけることも可能であり、その理論や技法を用いて検討することは、附属学校園における共同研究の整理に役立つだろう。

アクション・リサーチとは、「アクションを通じて、アクションが展開される時に、そのアクションについての知識または理論を創造することの両方を目的とする研究アプローチ」(Coghlan & Brannick, 2014/2021) のことである。アクション・リサーチは、レヴィンらによって編み出された後、多様な理論的根拠を融合しながら多様な研究領域で発展しているが、デューイの経験主義哲学も理論的基礎の一つとなっており、教育分野においても多種多様な研究が行われている(佐藤ら, 2005)。

附属学校園の教員による研究のうち、アクション・リサーチと称しているものは見当たらないものの、実質的にはほとんどが、「内部者としての『私』が『アクションの中で知る』ことを通じて実践者—研究者(内部アクションリサーチャー)となり(一人称プラクティス)、周囲の人々と協働(二人称プラクティス)しながら自分自身の組織へのベターメントを図り、そこから実践的／学術的な知見を発信する(三人称プラクティス)」(永田, 2021) という研究構造と合致していると言える。

たとえ単著の研究であっても、アクション・リサーチのベースには集団での協働という発想がある。「何よりもまず、『会話を続ける』ための方法」であり、その方法論は「議論の地

平を開き、集団的な省察の場を作り、そこで重要な状況についての新たな記述や分析を行い、それが新たなアクションの基礎となることを目的としている」(Greenwood & Levin, 2007/2023)。1人の教師の、1つの学校での授業だけで完結するのではなく、いかに継続して、協働して実践と研究を循環的に展開できるかが問われている。

附属学校園とICDとの共同研究を構造的に展開していく際にも、アクション・リサーチの理論は有用である。大学所属の教員は、附属学校園からみれば「外部アクションリサーチャー」であるが、同じ国立大学法人に所属する者として実践研究を行う場合には内部アクションリサーチャーの側面も持ち得る。このことは、同じキャンパス内の至近距離で、密な連携が可能な本学の構造の強みが反映される特長であり、「オールお茶の水」の理念とも合致する。その実現のために、実践者と研究者の信頼関係の重要性と生じやすい倫理的問題を意識し、多忙な中でも地道な対話と相互理解を重ねていくことが重要である。

2-3 今後の研究の展望

今後、附属学校園における研究の発展可能性を多角的に検討するためのアイデアとして、上述した附属学校園とコンピテンシー育成開発所との直接的な協働の他に四点を挙げる。

第一に、教育実践の非言語的な側面に着目した研究である。学校種別に研究業績を眺めると、幼児教育から高等教育へと、教育対象となる子どもの年齢が上がるほど研究業績が多い傾向がみられる。この背景には様々な要因があるだろうが、授業において子どもと教師の言語的・認知的側面に焦点が当たる割合が大きいほど、研究のための言語化や数値化といった抽象化・構造化がしやすいという点も、その一つであると推測される。しかし、「非認知能力」への注目にも示されているように、コンピテンシーには他者との相互作用や社会的・情緒的側面が多く含まれている(新井, 2016)。研究デザインや方法の工夫により、これらの非言語的側面についての研究が蓄積されることが期待される。

第二に、大学教員との共同研究である。大学においてもアクティブ・ラーニング等授業改善の試みが行われているが、幼小中高の教員ほどの時間とエネルギーを授業に注いでいる大学教員はおそらく存在しないだろう。附属学校園の教員が実践している授業には、大学では十分に組み立てていない授業改善研究の叢智が詰まっている。それらを大学の授業に応用していくような研究は有用性が高いと考えられる。

第三に、何らかの困難さをはらむ教育活動に光を当てる研究である。授業場面に限らない集団教育において、教師は全体からはみ出してしまう子どもへの配慮や介入をさまざま行っているが、そこでのこまやかなやりとりは、教師に内在する目に見えない実践知を形式知

に変換して研究に乗せていく際に捨象されやすい。しかし、教科や教科外の活動において「つまづき」を乗り越える経験こそが子どもの能力や意欲や責任感を育んでいく（石井，2015）。また、キー・コンピテンシーの掲げる諸価値が多岐にわたることから、コンピテンシーを育む実践を行う際には、諸価値の間に存在する緊張関係をふまえ、差異や矛盾に対処しながら展開することが必要である（松下，2010）。すなわち、教育活動の「難しい場面」「うまくいかない場面」にこそ潜在する豊かな知見を深く検討することが、コンピテンシー育成開発研究には求められている。

第四に、教師等の専門職自身のコンピテンシー育成開発に関する研究である。附属学校園においても大学においても、教師は「省察的实践家 reflective practitioner」であり、自らの悩みや失敗を通して課題を知り、目の前の園児・児童・生徒・学生や同僚との対話を通して自らと向き合い、自らを成長させていくことが、職務として求められている。そのような省察的姿勢は、子どもが自らのコンピテンシーを育てていくモデルにもなるだろう。

また、相互研修、後輩の指導、教育実習等を通して次の担い手を育てる実践も、コンピテンシー研究のテーマとなり得る。この点において、ICD に心理学研究者が多く参画していることは、専門職コンピテンシーについての学際的な共同研究の展開につながる可能性を秘めていると言える。特に公認心理師養成にはコンピテンシー・モデル（日本公認心理師協会，2022）が導入されており、反省的实践 reflective practice が中核的なコンピテンシーとして注目されつつあることが、教育と心理の専門家同士の対話を促進する契機になるかもしれない。そして、附属学校園における協働ができれば、教師や他の専門職の養成、自己研鑽、キャリア発達というテーマにおいても新たな知見を提供できる可能性がある。

IV おわりに

本報告書では 2022 年度～2024 年度の附属学校園教員による研究成果を整理し、今後の展望について検討した。ICD は今年度（2025 年度）で発足 4 年目を迎えており、諸事業も軌道に乗り、発展しているところである。附属学校園への研究支援についてもさらに広く柔軟に、そして互恵的に展開させていける可能性に満ちていると考えられ、今後ますますの支援体制の充実が望まれる。

謝辞

本報告書の執筆にあたり、附属学校本部学校教育研究部の檀淵めぐみ先生に資料作成へのご協力をいただきました。また、コンピテンシー育成開発研究所スタッフの先生方に構成や内容へのご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

資料：研究報告書・紀要・ウェブサイト（本報告書関係分）

文部科学省研究開発学校制度

お茶の水女子大学附属幼稚園 令和4年度研究開発実施報告書（第4年次）

お茶の水女子大学附属幼稚園 令和4年度研究開発実施報告書（第4年次・資料編）

お茶の水女子大学附属幼稚園 育児手帖～子育て中のおうちのかたへ～（その3）2023年3月発行

お茶の水女子大学附属幼稚園 研究紀要 「つくる」がうまれる暮らし（2023-2024年度）2025年2月発行

国立大学法人 お茶の水女子大学附属小学校 令和4年度研究開発実施報告書・第3年次 2023年3月発行

国立大学法人 お茶の水女子大学附属小学校 令和5年度研究開発実施報告書・第4年次 2024年2月発行

国立大学法人 お茶の水女子大学附属小学校 2024 令和5年度研究開発実施報告書（別冊） 2024年3月発行

お茶の水女子大学附属小学校・NPO法人お茶の水児童教育研究会 文部科学省研究開発指定校第85回教育実際指導研究会発表要項「学びをあむ（4年次）；新領域「てつがく創造活動」を中核とする教育課程の開発」 2023年2月発行

お茶の水女子大学附属小学校・NPO法人お茶の水児童教育研究会 文部科学省研究開発指定校第86回教育実際指導研究会発表要項「学びをあむ（5年次）；新領域「てつがく創造活動」を中核とする教育課程の開発」 2024年2月発行

お茶の水女子大学附属小学校・NPO法人お茶の水児童教育研究会 文部科学省研究開発指定校第86回教育実際指導研究会発表要項「学びをあむ（6年次）；新領域「てつがく創造活動」を中核とする教育課程の開発」 2025年2月発行

（文部科学省 研究開発学校制度 <https://curriculumdb.mext.go.jp/bc/kk/>）

文部科学省指定スーパーサイエンスハイスクール

お茶の水女子大学附属高等学校 令和4年度研究開発実施報告書 第I期第4年次 2023年
3月

お茶の水女子大学附属高等学校 令和5年度研究開発実施報告書 第I期第5年次 2024年
3月

お茶の水女子大学附属高等学校 令和6年度研究開発実施報告書 第II期第1年次 2025年
3月発行

(文部科学省指定スーパーサイエンスハイスクール

https://www.mext.go.jp/a_menu/jinzai/gakkou/1309941.htm)

研究紀要

お茶の水女子大学附属小学校 研究紀要 第30巻(2022年度) 2023年2月発行

お茶の水女子大学附属小学校 研究紀要 第31巻(2023年度) 2024年2月発行

お茶の水女子大学附属小学校 研究紀要 第32巻(2024年度) 2025年2月発行

お茶の水女子大学附属中学校 研究紀要 第51巻(2022年度) 2022年12月発行

お茶の水女子大学附属中学校 研究紀要 第52巻(2023年度) 2023年12月発行

お茶の水女子大学附属中学校 研究紀要 第53巻(2024年度) 2024年12月発行

お茶の水女子大学附属高等学校 研究紀要 第67巻(2021年度) 2022年6月発行

お茶の水女子大学附属高等学校 研究紀要 第68巻(2022年度) 2023年7月発行

お茶の水女子大学附属高等学校 研究紀要 第69巻(2023年度) 2024年6月発行

お茶の水女子大学附属高等学校 研究紀要 第70巻(2024年度) 2025年7月発行

ウェブサイト

お茶の水女子大学学校教育研究部 国立大学法人 お茶の水女子大学附属学校園 教材・論文データベース <https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/>

引用文献

新井英靖 (2016). アクション・リサーチでつくるインクルーシブ授業―「楽しく・みんなで・学ぶ」ために. ミネルヴァ書房.

Coghlan, D. & Brannick, T. (2014). Doing Action Research in your own organization (4th edition). SAGE. 永田素彦・高瀬進・川村尚也 (監訳) (2021). 実践アクションリサーチ―自分自身の組織を変える. 碩学舎・中央経済社.

Greenwood, D.,J. & Levin, M. (2007). Introduction to Action Research (2nd edition). SAGE. 小川晃弘 (監訳) (2023). アクションリサーチ入門―社会変化のための社会調査. 新曜社.

石井英真 (2015). 今求められる学力と学びとは―コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影. 日本標準.

加賀美常美代 (2018). お茶の水女子大学附属学校出身の大学進学者は附属学校での学びや経験を大学や社会でどのように活かしているか. 高等教育と学生支援, 8, 31-41.

美馬のゆり (2021). AI の時代を生きる―未来をデザインする想像力と共感力. 岩波書店.

日本公認心理師協会 (2022). コンピテンシー・モデル.

https://www.jacpp.or.jp/pdf/competency_model_jacpp.pdf (2025 年 1 月 12 日閲覧)

佐藤一子・森本扶・新藤浩伸・北田佳子・丸山啓史 (2005). アクション・リサーチと教育研究. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 44, 321-347.